

令和4年度横浜市地域福祉保健計画 策定・推進委員会 分科会1 第1回	
日 時	令和4年7月25日（月）15時00分～17時00分
開催場所	横浜市役所 18階共用会議室 みなと4・5会議室
出席者	対面参加：生田委員、内田委員、佐藤委員、塩田委員、名和田委員 オンライン参加：内海委員、佐伯委員、福本委員、宇野委員、山野上委員（10名）
欠席者	無し
オブザーバー	健康福祉局地域支援課、健康福祉局地域包括ケア推進課、市民局地域活動推進課
開催形態	公開（傍聴人0名）
議 題	議事【議事1】分科会長の選出について 【議事2】横浜市地域福祉保健計画策定にかかる分科会について 【議事3】第5期横浜市地域福祉保健計画全体構成（案）について 【議事4】多様な世代や人々がつながり地域活動に参画し活躍できる地域づくりについて 【議事5】意見交換
決定事項	【議事1】分科会長に名和田委員が選出された。
議 事	開会 議事 【議事1】分科会長の選出について 横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会運営要綱の第8条に基づき名和田委員が会長に選任された。 【議事2】横浜市地域福祉保健計画策定にかかる分科会について （事務局） 資料2について説明 （内田委員） 第2回の開催日と都合が合わない可能性があるが、意見を出す機会はあるか。 （名和田分科会長） 事後でも大丈夫とは思いますが、事前に意見を出していただけると、分科会の中で共有しながら議論を進めることができる。 （事務局） 第1回と同様に事前資料を送付するので、メール等でご意見をいただきたい。 （名和田分科会長） では、議事3「第5期横浜市地域福祉保健計画全体構成（案）について」あらためてご説明いただきたい。 【議事3】第5期横浜市地域福祉保健計画全体構成（案）について （事務局） 資料3の説明 （名和田分科会長） これは、前回の検討会でも暫定的に決まっているものであり、2つの分科会での検討内容は、主に第4章に反映されていくという理解でよいと思う。何か質問や意見等があ

ればお伺いしたい。

では、議事4「多様な世代や人々がつながり地域活動に参画し活躍できる地域づくり」の検討に入る前に、社会情勢やこれまでの計画推進を踏まえた現状や課題、2回の分科会の中での論点について、事務局より説明いただきたい。

【議事4】多様な世代や人々がつながり地域活動に参画し活躍できる地域づくりについて（事務局）

資料4-1、資料4-2、参考資料（事例）の説明

（名和田分科会長）

大変興味深い事例の紹介もあった。資料4-1はただいま確認いただいたので、話し合いでは資料4-2をご覧いただきたい。

前半に検討の視点1、後半に検討の視点2を意見交換する。最初の視点1は、「地域の課題を解決するための連携・協働について」日頃の活動の中で、他団体や組織等とどのようにつながりたいと感じているか、あるいは実際に取り組んでみてどうだったか。また、つながりをつくっていく上で難しい点や苦労した点、良かった点等について、それぞれの活動の中で感じていることを話していただければと思う。

【議事5】意見交換

（内海委員）

資料4-1にもあるが、サロンやカフェを開いても、男性はなかなか興味・関心を示さない。おしゃべりができると言っても、それを目的に参加するという人は非常に少ない。例えば、南区の六ッ川連合でもいろいろと試みて、好評だったのが、使っていない市の土地を有償で借り受けて、農園を「野外サロン」として行う取組だった。あまりおしゃべりは得意ではないが、黙々と作業をすることには魅力を感じる方が男性高齢者の中に一定数いて、参加につながった。連合自治会で見守り活動の一環で行う位置づけで希望者を募ったところ、週1回の活動で20数名の人が集まった。回を重ねるうちに、散歩のコースに組み入れて毎日のように手間暇をかけるような人も出てきて、少しずつ仲間意識も生まれた。平成23年度から始まり、コロナ禍でも何とか継続している。その中から、推薦されて自治会長や青少年指導員になった人もいる。このような形で地域の中の居場所ができ、見守りそのものの成果が得られた事例があった。

他の地域では、農作業でいうと栄区の「緑栄塾」があり、60人程が活動している。山の上の農園なので、うどんやそば、大豆等、毎日収穫しなくてもいい作物しか作れないが、うどんの粉を製粉して、それを買い取ってくれば無償でうどん打ちの講座をするとして、地域ケアプラザのデイサービスでうどん打ち講座を行った。昔うどん打ちをやっていた車いすの人が立ち上がって打ち始めて、皆が驚いていたとの話も聞いたことがある。いつの間にか里山保全団体が、福祉の担い手になるということが実際に起きている。今はそれが広がって、栄区中の地域ケアプラザでうどん打ち等を行っている。

また、森を間伐するノウハウがある泉区古橋の「市民の森」の団体は、お年寄りから庭木の手入れを頼まれたことをきっかけに、ニーズがどんどん広がり、高齢者宅の生活支援の取組につながっている。

地域福祉と言うと、ハードルが高く、自分には関係ないと思っている人たちに対して、自分の興味・関心や、既に取り組んでいることの結果、自然と福祉につながれると、担い手の拡大、裾野の広がりにつながっていくのではないかと思う。福祉は自分には関係ないというハードルに対し、つなぐ人の力が非常に大きいのではないかと思っている。

(名和田分科会長)

昔、ドイツに留学している時に、家族に声をかけてくれたのが編み物グループだった。編み物は会話をしなくても参加できるので、毎月4～5人で集まって活動していた経験を思い出した。

検討の視点2についても何かお考えがあれば、ご発言いただきたい。

(内海委員)

人は興味・関心があることは深掘りするし、継続もするし、創意工夫が生まれる。興味・関心からスタートして、結果として福祉の役に立つようなことにもっと取り組んでいかないと、裾野は広がらない。そこが地域福祉に巻き込む原点と思っている。

どのようなことに興味・関心を持っているのか、まず知ることから始めて、徐々にそれが地域福祉や福祉の展開に役立つということは、先ほどの事例のように実際に起きている。分野やテーマといったことに私たち自身も縛られ過ぎていると感じるので、やらされ感ではなく、地域福祉の担い手になってもらうにはどうしたらいいか、少し具体的な事例も通して考えていかないと、裾野の拡大は広がっていかないと思う。

「地域福祉を一緒にやってくれませんか」と言っても、自分と関係がないとなかなか心に響かない。自分の興味・関心がある部分とつながると、少しは心が動くのかなと感じている。長く福祉に取り組んでいる方は、そういう考え方が不謹慎だという話をされて、ボランティアに取り組もうとしている方が腰を折られたという話もよく聞く。このあたりも、本当はもう少し掘り下げて議論できればと思う。

(名和田分科会長)

私も港南区で2020年に20年ぶりに市民活動調査を行ったが、昔からある生涯学習や福祉の団体はこの20年の間にかなり減少し、高齢化が進んでいる。むしろ単純に分類できないような市民活動がかなり増えていた。これは単なる偶然の結果だったかもしれないが、今の内海委員の発言等を考え合わせると、様々な切り口、入り口から、結果として地域福祉の連携につながっていくことが大切なのかなと思った。

(生田委員)

地域ケアプラザでは、地域活動をしている団体に部屋を貸している。今の話にも関連するが、趣味活動のつもりで地域ケアプラザに来ている方も、そこから、市民活動や地域のボランティアにつながっていくケースも多い。高齢者サロンができた頃に、話をし手伝うよと声をかけてくれたのは、もともとは趣味のダンスに来ていた方だった。

今も複数の団体が様々な活動を行っており、皆さん一生懸命活動している。様々な内容で活動しているからこそ、地域の方の多様な参加の選択肢になるし、地域に関わる意識を持ってもらえるようなアプローチをしていくことが必要だと思う。

また、畑をやっているサークルの人たちが、ケアプラザの庭の管理団体になってくれたケースもある。多種多様な活動について、こちらがまず理解する。そして、障害のあ

る方や色々なところと絡めたいのであれば、一緒に参加しませんかとつなげていくことが必要だと感じた。

(山野上委員)

私たち市民セクターよこはまでも、地域の方々の活動を支援していて、よこはま地域づくり大学校では、名和田委員や内海委員、皆さまにご協力いただいている。

地域で何かやりたいが、まだ気持ちが固まっていない人たちに声をかけて、旭区で「かるがも塾」を始めた。退職後の地域とのつながり方が分からない方や、町内会役員になったが、どうしたらよいか分からない方たち等が集まり、地域の取組や活動している人々について紹介しながら、色々な活動を見て回る取組を始めた。今ではそれが「地域づくり大学校」となり、教わるだけではなく自分たちで学んで広げていく場になっている。

私は移動支援にも関わっているが、テニスサークルの主催者で、車が足りず通院できない人がいるという話を聞いて、自主的に空いている時間を使って自分たちの車で送迎を始めてくれた方や、マージャン仲間、テーブルを囲む4人以外は、依頼があれば行くよと移動支援活動を始めてくれた人たちがいる。

活動者が高齢化し、純粋に無償でボランティアに関われる人が減ってきている中で、そういった場を提供することは、新しい活動を行いたい人へのきっかけづくりとしてはいいのかなと思っている。

市民セクターよこはまは、市役所1階の市民協働推進センターで活動しているが、年間800人程が相談に来ている。その中には企業も含まれており、ボランティア団体となぐことも少しずつ出来ている。団体の立ち上げや他の機関との連携についての悩みが最も多く、つなぎ役として、気軽に相談できる場があることも大切だと思っている。

(名和田分科会長)

企業からの相談も多く、無償でボランティアをできる人が減っているというのは本当にそうだと思う。

(山野上委員)

ボランティアではないが、企業的な経営と社会貢献活動がきちんと回っていく仕組みも出来始めているのが、最近の特徴かと思っている。

(塩田委員)

私どもシルバークラブが課題としてこれからどうやって取り組んでいくべきか考えていることについて、2つの事例を挙げて話をしたいと思う。

一つは、東日本大震災を契機に不安を感じていた住民に対し、災害時要援護者支援の取組を開始した。集合住宅に300世帯があり、この人たちとのコミュニケーションをどうやって取っていくかを考えて、各階ごとにミーティングを重ねながら、それぞれの許せる範囲で情報を共有し、支援を進めている。約10年近く経ち感じていることは、何かあった時に助けて欲しいということ、躊躇して言い出せない人たちがいる。我々はそれをどのように掴んで、全体の支援につなげていくかということが、大きな課題だと考えている。

もう一点は、シルバークラブの中に「手助けしてあげ隊」を結成している。日常生活の中で、高いところの物や大きい物、重たい物等をきちんと整理できるよう支えあう取

組を、皆に周知しながら、組織立て、決め事を定めながら取り組んでいる。

何となくやっていることと、きちんと決め事を定めて取り組んでいることには大きな違いがある。長く継続できるような仕組みにしておく必要があるということ。あまり大きく構えず、小さなことでもいいからできることから取り組み、その積み重ねでいいと思っている。本当に困っている人たちを見だし、手助けをし、皆が明るく安心安全に暮らせるような地域をいかにつくるべきか、小さな福祉を目指して我々はこれからも続けていきたいと思っている。

「継続は力なり」、「続ければ人生」とよく話しているが、目指す姿に対し、具体的な事例を積み重ねながら継続して取り組むことが大切だと思う。

(佐藤委員)

9年前に私が神奈川区の地区連長を務めていた時に、地区の支えあいプランをつくるということで、それで初めて福祉に参加をした。地域をまとめるにはどうしたら良いのか考えている時に、中学校の副校長先生が出てきてくれた。我々の地域に昼間いる若者と言えば中学生ぐらいで、あとは皆お年寄りである。災害が起こった時に、助ける人手が不足しているという話をして、地域をひとつにするためにスローガンをつくってほしいと副校長に依頼すると、早速生徒会に投げかけて募集をしてくれた。そして、「あいさつは あふれる笑顔のあいことば」というスローガンができ、マークや旗を作って各町内会や道路に並べ、私どものPRのひとつになっていった。

皆で挨拶運動を進めてきて、それがきっかけかもしれないが、その後、子どもたちの方から、公園、通学路の清掃をしたいという申し出があった。地域のおじいちゃん、おばあちゃんを含めて皆で手伝うという形になり、まちの中がひとつになってきたかなと思う。

私は福祉のための組織をつくっては駄目だと考えている。以前、この家は誰と誰が見守りをするというマップを用いた取組をしたが、訪問者との相性が合わず、失敗をした経験がある。今は「向う三軒両隣のまち」というキャッチフレーズで、朝起きたら、自分の家の前、後ろ、右左、その家がどうなっているか、雨戸が開いているか、味噌汁の匂いがするか、夜になったら門灯がついて雨戸が閉まっているか、そんなことだけ見る。何かおかしいと感じたら、自治会長、連合町内会長、民生委員に話をするよう伝え、取組を続けているが、孤独死をしてそのまま時間が経過してしまったような例はほとんどなくなった。

年の瀬には、小学校の清掃を子どもたちと一緒にいたり、清掃の仕方を教えたりしている。9年が経過し、ようやくまちの中がひとつになってきたと感じている。

福祉についても、自治会のメンバーがかみ砕いて、地域に分かってもらうように伝えていくことが役割だと考えている。

(福本委員)

この分科会のテーマの「多様な世代」というところで、子育ての世代の分野から話しをさせていただきたい。

現在、地域子育て支援拠点の施設長は、全区の地域福祉保健計画の策定委員に1人参加しているが、この地域福祉保健計画とどのように連動して取り組んでいけばよいか、運営団体にとっても考えるポイントだと思っている。

子育てボランティアを行う2団体から担い手の高齢化、新たな担い手の確保について相談があり、私たちの団体でも学生をどのように巻き込んでいくか、担い手というキーワードで様々な課題があった。他のNPO法人に依頼して、子どもに関わるボランティア講座を開催し、様々な団体の活動紹介やいろいろな分野の方を集めてワークショップを行った。その際、区の福祉保健課や区社会福祉協議会（以下、区社協）の担当者にも参加していただき、各団体でどういう担い手を募集しているかについて、一気に話ができる場を設定した。結果、シニア層の方から現役の子育て中の母親まで、地域の支援活動につながることができ、こうした場をコーディネートしていくことが大事だと感じた。

地域で役に立ちたいと思っている人は若い世代もいて、休みの日に子どもを預かってくれる方や横浜子育てサポートシステムという有償ボランティアで活動している方もいる。地域子育て支援拠点を利用している方は30代の方が多く、そうした方をうまく地域につないで、自分の住んでいるまちで何か役割を持って暮らせていければ、とても良いのではないかと。お互いさまの子育て、お互いさまの地域活動のような形につながっていくのではないかと考えている。

地域ケアプラザの活動について私たち地域子育て支援拠点が知ること、逆に私たちの活動を地域の方に知っていただくこと等、お互いを知ることが大事だと思う。

(名和田分科会長)

戸塚区はたしか区内の施設交流会を初めて行った区だと思う。専門機関同士が知るとい点では、戸塚区はかなり進んでいるのではないかと。

(宇野委員)

地域の人を巻き込んだ取組を行ったことはないが、このような取組に関わらない理由についても、きちんと見ていく必要があると思う。つまり、参加する理由をきちんとつくってあげることが大事ではないか。例えば、私の祖父はもともと人との関わりは好きな方だったが、デイサービスには行きたくない、高齢者扱いは嫌だなどという思いもあるようだった。結局、行けば元気になって帰ってくるのだが、行きたくない理由には、恥ずかしさやプライド等、いろいろなものがあると思う。

祖父はお茶屋だったので、お茶のいれ方教室で同年代の人に教えるとなると、しっかり準備を行い、自分が役に立ったという気持ちでとても楽しかったと言っていた。このようなことを一緒にやりましょうと提案したり、困っているので助けてほしいと声掛けをしたり、その人なりの強みや経験を活かせるとか、極論として参加すればお金がもらえとか、行かない理由をきちんと分析して、ほんの少しの行く理由をつくってあげることが大事だと思う。

(名和田分科会長)

第4期の際、その人の居場所と出番をつくるという話を、中野委員もよくおっしゃっていた。とても良い視点だと思う。

(佐伯委員)

今年の4月からは学校と地域がつながる活動が少しずつ入ってきたが、福祉施設に行くという活動はまだあまり復活していない。コロナ前から反町地域ケアプラザの地域活動交流コーディネーター、区社協、民生委員、地域の自治会長、保育園の園長先生たち、

学校・地域コーディネーター担当の私が一緒になり、「幸ヶ谷子ども育みフォーラム」を立ち上げていた。しかし、立ち上げてすぐにコロナになり1年間休止していたが、コロナが落ち着いたら何を実行するかという話し合いを、月に一度中心メンバーで行っていた。地域の子どもたちの遊びや、危険な場所等についての地図のまとめや、お祭りのようなことを行いたいとの提案を受けて、この2月に育みフォーラムという形で、保育園の園長先生や自治会長を呼んで大きな委員会を行うことができた。また、7月に花火大会を行い、手持ち花火を200人分用意してフェスを行った。かなり暑い日で参加者は少ないかと心配していたが、とても好評であった。

母親たちの話に耳を傾けると、コロナで保護者同士の交流もなく、クラスに知っている保護者も1人しかいない等の話しをしていたが、この花火大会の後に子ども連れで立ち話している姿を見て、やって良かったと感じた。その際、ニュースレターをつくり、地域活動の今後の予定や、子どもたちが集まっている場所等の情報を載せて配布することができた。

また、先ほど、地域の会に男性に参加してもらうことがなかなか難しい話があったが、幸ヶ谷小学校では、おやじの会が活発で、地域のお祭り等にも参加して、屋台を出したり、遊びをしたり色々なことを計画している。

一方、少し困っていることとして、幸ヶ谷小学校は2つの連合、2つの地域ケアプラザを抱えている場所だが、今回、幸ヶ谷の学校に近い地域ケアプラザとは関わることができたが、もう一つの地域ケアプラザを巻き込むことができていない。子どもたちを住んでいる地域では分けられないので、そこが難しいところである。

(内田委員)

横浜市身体障害者団体連合会には、様々な障害者がいて、例えば、内部障害の方、コミュニケーション関係の障害の方、身体障害者等、多様な人たちがいるが、地域でのつながりとなると、その方法は違っている。

私の知っている範囲だと、ろう者、難聴者、脳性麻痺の人たちは、コミュニケーションがとても難しく、地域とのつながりができるかどうかは大きな課題になってくる。ろう者の場合には、昭和の終わりから手話サークルがあり、一緒に交流をしたり、手話の勉強をしたりとつながりがあったからこそ、今の状態につながっている。横浜市では手話サークルはたくさんあるが、手話に関わっていない人たちにつなげるとなると、なかなか難しい。

防災・災害関係について、災害が起きた時に、ろう者に対しどういった対応方法を取るべきかが大きな問題になっている。市民には防災訓練があるが、聞こえない人たちは、なかなか参加できない。やはりコミュニケーションの問題がとても大きいと思うし、皆さん遠慮してしまう。そうしたことから、町内会との関わりをどのようにつくっていくのか、私たちは考えなければいけないと思っている。自分から積極的に町内会の人たちに会って話しかける以外に方法はないのではないかと思う。

しかし、精神障害者の方と私たち、ろう者との関わりは以前と比べて深くなってきている。なぜなら、精神障害者の方は人との関わりに難しさを感じる人が多いが、手話で話をすることで、安心して交流することができる。今は2人精神障害者の方がサークルに参加している。このような地域のつながりが重要だと思っているが、様々な障害者が、

健常者の人たちとどのようにつながっていけるか、さらに工夫していきたい。

(名和田分科会長)

精神障害者とうろう者のつながりというのは、なかなか興味深い。こういう形で工夫してつながりが増えていくというのは大切と思う。よく防災訓練で障害のある方も一緒にという取組が多くなっているかと思うが、これについて何か発言はあるか。

(佐藤委員)

今話を聞いて、我々も防災訓練をこの秋に行う予定だが、どうすれば話があったような方が防災訓練に出ていただけるのか、考えなければ駄目だと思った。本番の時はとても手が回らなくなるので、訓練の時にこそしっかりと行う必要があると実感した。それが一つの課題になると思う。

(内田委員)

私が覚えている範囲で申し上げますと、7～8年前のことだが、とても良かったことがある。私の地元港南区で、区長に会い、話をする機会があった。それがきっかけで、防災訓練を私たちと一緒にいきましょうと言っていた。全員で6人だったと記憶しているが、聞こえない人たちが手話通訳と一緒に防災訓練に参加することができた。その後、区長が代わって曖昧になり、つながりや連携というのが中途半端な感じがして、とても残念だった。コロナもあるが、あらためて、もう一度地元で区役所の方たちと話し合いをして進めていきたいと考えている。待っているのではなく、自分たちから働きかけるのが大切だと思っている。

(名和田分科会長)

先ほどの発言にもあったが、障害当事者の方から意思表示をしていただくことも、とても大切なことだと思う。この地域福祉保健計画の第1期の時からそういった議論があったことを記憶している。それでは、次の検討の視点2に移りたいと思うが、その前にオブザーバーからもぜひ今のことに関連して自由にご発言いただければと思う。

(オブザーバー) (健康福祉局地域支援課)

地域支援課は地域ケアプラザの18区の取りまとめと民生委員関係を担当させていただいている。地域ケアプラザに関していえば、横浜市独自の市民にとって身近な福祉保健活動の拠点ということで、30年前から整備を始めて、今は143か所だが、計画上は146か所、中学校区に1か所で令和6年度頃までに整備を完了する予定になっている。先ほど生田委員からもご説明があったように、地域ケアプラザは、貸し館を行ったり、地域活動交流コーディネーターが在席し、場だけではなく人も配置して、地域とのつながりをつくる場になっている。皆さんの発言からもそういう役割を期待していただきながら、実際に活動しているということを実感した。

地域福祉保健計画を具体的に進めていく時の想像力のようなものを働かせるためには、工夫している事例や、地域のそれぞれに合わせた取組をたくさん知ることがそのきっかけになっていくのではないかと思った。いかに具体的な事例を地域の皆さんに伝えるか、地域ケアプラザの皆さんに知っていただいて活かしていくかというところを考えていけたらと、所管課として感じたところである。

(名和田分科会長)

第1期の時は、地域ケアプラザの批判が多く見られた。しかし、この十数年でケアプ

ラザの評判はかなり向上し、それだけの努力をされていると思っている。地域の方もそれを期待したし、また助けもした。この十数年間で、その点に関して横浜の地域はとても良くなったと私は実感している。

(オブザーバー) (健康福祉局地域包括ケア推進課)

これまで委員の皆さまからのご発言を聞いていた中で、一つ、情報提供を含めて紹介したい事例があるので、話をさせていただきたい。

子ども地域包括ケア推進課では、高齢者の介護予防、生活支援、社会参加という取組を推進している。その中で当課では令和元年度から、ヨコハマプロボノ事業(ハマボノ)として、地域に関心を持っていただくきっかけ、また地域活動に参加していただくきっかけとして取組を進めていて、今年が4年目となる。

地域で活動されている方々は、担い手の確保といったことも含めて様々な課題を抱えている。その中で、社会人や社会人経験者等がボランティアとして地域の活動に参画し、地域のボランティア募集のホームページやチラシの作成を手伝ったり、ボランティアが継続的に地域に関わってもらえるようなマニュアルづくりをしたり、運営に関わる部分でのサポートを地域の活動や地域に触れていただくきっかけづくりとして取り組んでいる。

特殊なITやデザインのスキル等を求めているわけではなく、長年の社会人経験をそのまま地域で還元していただくきっかけづくりとして取り組んでいる。男性も非常に多く参加しており、まだまだ課題はあるものの、地域活動の団体の活性化とあわせて、ボランティアの確保・拡大について取り組んでいる事業なので、皆さまの話を聞いて紹介したく、話をさせていただいた。

(名和田分科会長)

地域の中で専門人材を見つけることは、今後、非常に重要になると思う。私の関わっている全国市長会が設立したシンクタンクの日本都市センターの調査の中で、今後、地域課題の解決で求められる分野と専門人材が必要な分野がほぼ一致しているという方がいた。今後、地域の側もこういったハマボノのような形で専門人材を活用することも益々重要になると私も感じている。

(オブザーバー) (市民局地域活動推進課)

市民局地域活動推進課は自治会、町内会をはじめとした地域活動の支援を担当しているが、地域づくり大学校の所管もしている。話を伺っていて、担い手不足の中で、やりたいと思っている方はたくさんいるので、いかに興味・関心を活動につなげていくかというところが大切だという話は、とても感銘を受けたところである。今後、地域活動に参加してもらうために、いかに裾野を広げるか、非常に大きな課題だと感じている。いただいたご意見なども参考にしながら、いかに活動につなげていけるかについて、考えていきたい。

また、福祉、福祉とあまり前面に出さずに、という話もあったので、いかに取っ付き易くするかというところが大事ではないかと思っている。

(名和田分科会長)

まだ時間は少しあるので、検討の視点2で、ここは自由にアイデア出しをするという部分となるので、時間の許す限りご発言をお願いできればと思う。先ほど、内海委員か

らは、興味・関心があることから発想して、そこから発展した結果として、福祉的な活動になるように考えないと、理念論だけではなかなか人は増えないという話があった。そのことを思い出していただいた上で、検討の視点2のアイデアについて自由にご意見をいただければと思う。

(佐藤委員)

私どもは地域で住民アンケートを令和2年に行った。神之木西寺尾連合自治会では、5,300人に配布して回収率が53%であったが、その結果として、応援なら幾らでもするが、自治会の役員等を担当するのは拘束されるから嫌ということがあった。応援については、防災拠点の受付、品物の整理、お祭りの相談等である。長く役を担当するのはあまり良しとしないが、一時の応援は皆さん意外と希望されていることが分かった。私の名前で全部フィードバックして、今度のお祭りの時お手伝い願いますという手紙を書いたが、コロナになってしまい、行事が何もできなくなってしまった。せっかくこのような回答をしてくれた人の厚意を自治会の中で反映できなくなったというのは非常に残念だった。また機会があれば、あらためて、それを掘り起こして応援をいただこうかなと思っている。地域の人が今こんなことを考えているというのが分かって、まちづくりに一つの成果を期待できるのかなという感じを受けた。

(名和田分科会長)

自治会でもアンケートに基づいて住民ニーズを捉える取組が、割りと増えていると思う。地域福祉保健計画の地区別計画の一環なのではないかと思っていて、私の住んでいる自治会もそのようなことを実施していた。地域福祉保健計画と一緒にやることで、自治会も元気になっていくと私も地元で感じている。

(佐藤委員)

もう一つ、先ほど申し上げた学校とのつながりについて、私は年に1回、学校で子どもたちへ防災についての話をして、防災拠点の訓練には大勢が参加してくれている。災害が起きた時に助けてくれと言うと、皆うなずいてくれるし、簡易トイレを組み立ててくれたり、いろいろなことを行ってくれている。その辺りでも学校とのつながりができたことが、良かったと感じている。

(宇野委員)

私も内海委員が初めに言っていた興味・関心から広げるというのは、そのとおりだと思っている。そのために何が大事なかと考えると、教育現場で取り組んでいくことが良いのではないか。興味や関心が湧くにはそれが良いことだと教えたり、実際に経験して楽しいと感ずることが大切。特別でない方でもどんどん学校に入って話をしたり、実際に学校の外に出て、あのおじいちゃんはこのように喜んでいよね、これはすごく楽しいね、とそういったことがあってもいいのかなと思っている。

自分には5歳の子どもがいるが、ローラースケートの練習していた時に、「こんな遊び方をしたら転んで危ないよ」と言ったら、以前に自転車の練習で「転ぶことは頑張っている証拠だから頑張ろう」と言ったことを覚えていて、転ぶことは悪いことじゃないと言いつ返してきた。このようなことは、子どもたちにどんどん入っていくのだと思うと、すぐには芽が出る話ではないが、大人になった時にもつながっていくのではないか。

(内田委員)

今お話があったとおり、教育の現場が一番大切だと思っている。手話を教えると、子どもは本当に関心を持ってきて、とても良い機会になっている。子どもたちが大きくなった時に、障害を持っている聞こえない人たちがいるということが分かる。手話で挨拶する、簡単な話ができるということが分かる。そのためには、小学校など学校全体で、ろう者を含めた様々な障害者、または高齢者の状況を理解してもらうために、きちんと体験談を話してあげたりすることが良いのではないかと。教育委員会にもぜひ関わってもらいたいと思っている。

(名和田分科会長)

今の教育長は元健康福祉局長なので、期待したい。専門機関の方で、こういうことをやってみたいということでも構わないが、如何だろうか。

(福本委員)

ひとり親家庭に、拠点の強みとしてできることとしたら、子どもを遊ばせながら母親たちがほっこりと横のつながりをつくる場を設定するのが、私たちにできることかと思って取り組んでいる。フードバンクや保育士を目指している専門学校とつながったりして、色々なネットワークを活用して、拠点だけではできないことを、様々な団体の力を借りて取り組んでいる。

この取組のアイデアとして大事にしていることは、課題解決のゴールがどこにあるのかということ、皆が共通認識を持つようにしている。私たちの団体の強みや施設としてできることを、地域で活動している皆さんに知っていただき、つながるとことで、win-winの関係になれることをしっかりとアプローチしていくことが大事だと思っている。

興味・関心を持つこともそうだが、私自身、誰かのために役に立つからこの仕事を行っているわけではなく、自分が大変だったので自分ごととして捉えていくうちに、だんだん誰かのためにつながっている。自分がワクワクするやり方が、皆さまとどのようにつながっていくのかを意識しながら取り組んでいる。

(名和田分科会長)

課題解決のゴールをきちんと目指して、皆が共有するというのは大切だと思う。

(塩田委員)

シルバークラブというのは、皆さんご存じのように会員制で、希望者を募って会員になってもらい、会費を徴収して運営しているという歴史がある。我々は会員以外の高齢者も当然対象として、色々な計画を実行していきたいと思っている。

私は港南区の野庭という地域に住んでいるが、会員以外を含めた「オール野庭友愛活動」を設立した。皆で支えあい、たまり場をつくって、楽しくやってみようという活動で、今、会員以外の方も含めて声がけをしている。このような活動を広めていき、シルバークラブの会員ということではなくて、オール高齢者を対象にした、たまり場や話合い、支えあいといったものを目指していきたい。一つの目標を持って、コンセプトにして取り組んでいくことも非常に大事だと考えている。皆さまのご協力を是非お願いしたいと思っている。

(名和田分科会長)

では、本日はこの辺で終了したいと思う。あと一回、開催を予定しているが、今のと

	<p>ころは、資料４－２の下に書いてある視点を議論していく予定である。また、本日は非常に豊富な議論があり、次回の分科会に向けて十分に分析を行い、より有意義になるように準備をしていただければと思う。</p> <p>では、これで議事５を終了し、最後に第２回の分科会１について、事務局よりご説明をお願いしたい。</p> <p>(事務局)</p> <p>資料４－２、第２回の第１分科会について説明。</p> <p>(名和田分科会長)</p> <p>本日はハイブリッド方式での実施で不慣れな点もあり、何か不都合や留意してほしいということはあればご意見いただきたい。</p> <p>(内田委員)</p> <p>オンライン参加者の方の画面が見にくいので、工夫していただければありがたい。</p> <p>(事務局)</p> <p>会場の参加者の皆さまが、オンライン参加の方のお顔が見づらいとのことのため、次回に向けてやり方を考えたいと思う。</p> <p>(名和田分科会長)</p> <p>事務局もいろいろ細かく検討していただき、次回はさらに充実した話し合いができることを期待している。ありがとうございます。進行を事務局にお返すする。</p> <p>(事務局)</p> <p>次回の分科会１の開催は、令和４年９月２１日１５時から、同様の会場で開催予定である。今後の感染状況によって会場や実施形態等が変わる可能性もあるが、その際は改めて連絡させていただければと思う。</p> <p>以上をもって、本日の会議を閉会とする。本日はお忙しい中、ご出席いただき、ありがとうございました。</p> <p>閉会</p>
<p>資 料</p>	<p>○令和４年度第１回 横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会 分科会１ 次第</p> <p>○横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会 分科会１委員名簿 (資料１)</p> <p>○第５期横浜市地域福祉保健計画策定にかかる分科会について (資料２)</p> <p>○第５期横浜市地域福祉保健計画全体構成(案)について (資料３)</p> <p>○現状と課題について (資料４－１)</p> <p>○分科会１検討シート (資料４－２)</p> <p>○横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会運営要綱 (参考)</p> <p>○事例 ・個別支援と地域支援の融合Ⅱ(抜粋) (参考)</p> <p>・令和３年度第１層生活支援コーディネーター活動事例集(抜粋) (参考)</p>